

AIは民主主義を深化させるか？ 〔Ⅱ〕

政治や政策をめぐる議論の場において、生成AIはどのように活用できるのでしょうか。自治体におけるChatGPTを使った住民ワークショップの事例を基に考察した。ワークショップでは、生成AIはアウトプットをする際にその場にいる人に忖度することができないなど、人間どうしの議論で生じがちな制約を乗り越えるのに役に立つ様子が見られた。

同時に、生成AIには、誤情報や政治的に偏った内容を提示するといったリスクもある。自治体などにおいて議論の場に生成AIを導入する際には、議論はあくまで人間中心とするなど、本報告書で提示するガイドラインを参考にすることが望まれる。

● ワークショップで見られたChatGPTの効果（第2章）

ワークショップでは、中学生を中心とした若い住民が集まり、北海道東神楽町の2050年に向けた長期的なビジョンを議論した。参加者はワークショップ当初、日常生活の中で感じる課題を述べるが多かった。しかし、参加者がChatGPTに色々な質問をし、出てくる回答に触れることで、自身の考えとChatGPTの出力を掛けあわせ、未来志向の政策アイデアを提示するようになった。

● 生成AIの活用可能性（第3章第1節）

ワークショップを通して見えてきた生成AIの活用可能性として、以下の点を挙げることができる。

- ・人間が持つアイデアを発展させる。
- ・その場にいない人（未来人など）の立場を代弁してもらうことができる。
- ・アウトプットをする際に、その場にいる人に忖度することがない。
- ・ワークショップに必要な資料作成などの業務を効率化する。

● 生成AIのリスク（第3章第2節）

同時に、生成AIを使用する際のリスクもいくつか指摘できる。

- ・地域の雰囲気や関係者の空気感といった「現場知」を学習するのは難しい。
- ・政治的に偏った内容を出力する可能性がある。
- ・誤情報をあたかも正しい情報であるかのように提示することがある。
- ・生成AIが議論の場に入ることにより、人間の側が拒否反応を示す可能性がある。
- ・透明性やアカウンタビリティが十分ではない。

● 生成 AI 活用のガイドライン（第 4 章）

自治体などにおいて生成 AI を使った議論の場を設ける際、生成 AI の可能性を最大限生かしつつ、想定されるリスクに備えるために実践すべきことを、ガイドラインの形で挙げている（図）。

大原則

(1) 議論は人間中心とし、生成 AI はあくまで「ツール」として位置づける

(2) 生成 AI を使う目的を明確にする

生成 AI へのインプットについて

(3) 学習させる情報のバランスに配慮する

(4) 個人情報のインプットは避ける

生成 AI のアウトプットについて

(5) 生成 AI のアウトプットと人間の発言を区別する

(6) 生成 AI のアウトプットを事前にシミュレーションしておく

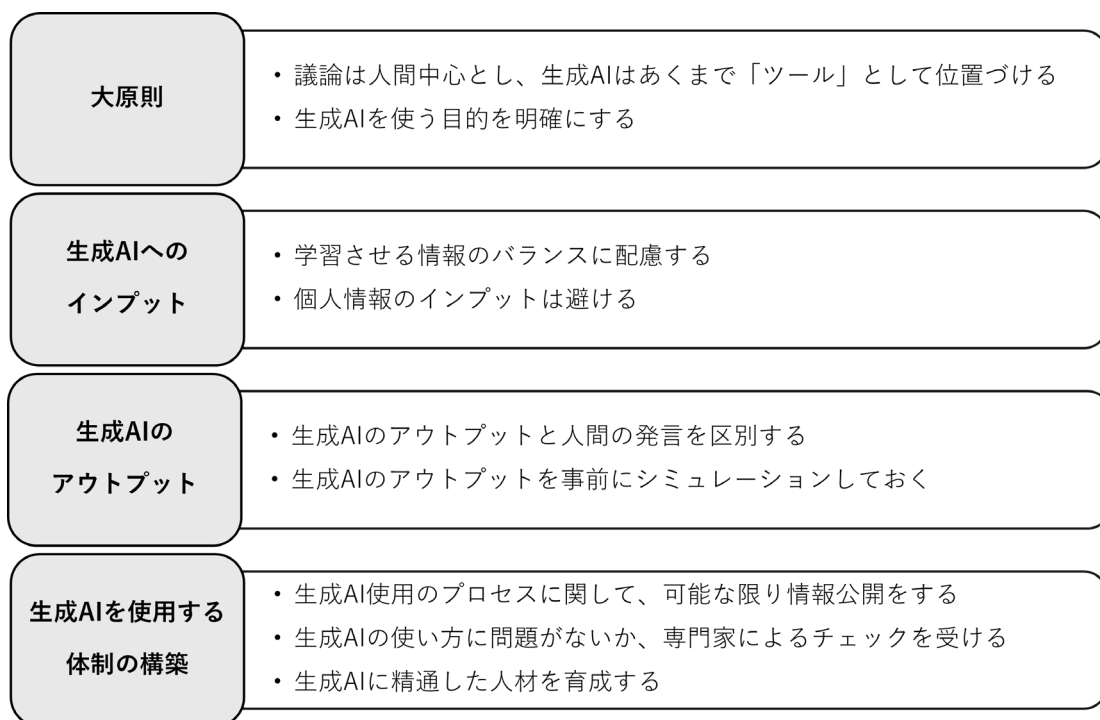
生成 AI を使用する体制の構築

(7) 生成 AI 使用のプロセスに関して、可能な限り情報公開をする

(8) 生成 AI の使い方に問題がないか、専門家によるチェックを受ける

(9) 生成 AI に精通した人材を育成する

図 政治的な議論における生成 AI 活用のガイドライン



著者

谷口 将紀 NIRA 総合研究開発機構理事長／東京大学公共政策大学院教授
竹中 勇貴 NIRA 総合研究開発機構研究コーディネーター・研究員

問い合わせ先 03-5448-1710 info@nira.or.jp

研究報告書本体の URL <https://www.nira.or.jp/paper/report242503.pdf>



PDF はこちらから

